

テイルデ記号の機能

有吉俊二

0. およそ言語の表記において、略記とは極めてはるかなる昔から行使されてきたものである。別稿に記した如く、ラテン語表記初期の段階に端を発し、中世へと向うにつれ略記は筆写上の一般的様式として、また読書の際の基本的了解事項としての地歩を固めていった。⁽¹⁾別稿との重複を恐れずにここに繰り返すならば、略記とは、①筆写の作業時間の短縮化、②筆写の材料(皮紙など)の節約、といった事、つまり筆写時間とその材質面に一種の“経済の原則”が適用されて出現した現象と言えよう。

ところで、略記は元の言語形式に復原される事 recoverability が念頭におかれ為されるものではあるが、他方そのやり方によっては、復原困難・読みずらさが前面に出てくる場合だってある。⁽²⁾つまり頻繁に用いられる略記は、いわば独自の綴り字としてゲシュタルト的単位 Gestalt unit を書き手と読み手の両者の脳裡に定着させ一対一の対応を保持するであろうが、逆に多くの略記が種々の様式でもって為されることとなると、元の言語形式との対応が極めて薄弱とならざるをえない。が、この復原作業を常に可能となすのは、原則的な省略の様式 abbreviate rules および文脈 context である。

略記の具体的様式は、時代・地域によって様々な相貌を呈すが、略記に関する特筆すべき二事項を指摘し、本稿のプロローグを締め括りたい。まず一点。アルファベット表音文字が導入された過程には、語頭音をその字形の表音価と見做す『頭音の原理』Principle of acrophony が重要な役割を果たしたという説があるが、⁽³⁾仮にそうであるとすれば、これは略記の方式と密接な関連があるものと筆者は考える。つまり、省略の原理は、文字発展上の大革命とも言うべき単音文字出現に大なる役割を果たしたと言えるのではないか。

第二点。略記が正しく復原されるには文脈が必要であるし、書き手も文脈に依存して略記を選ぶ。がこのようなコンテキストの利用・依存は、言語記号そのものが持つ特性に他ならない。例えば、多様な語義を蔵する単語の意味合いの限定は、文脈によって決せられる事を思い起こしていただきたい。略記は確かに派生記号にすぎないが、本来の記号(列)と本質的に変らぬ性質を備え持っているのだ。

1. 中世のラテン語表記の実際：その概略

ルネッサンス以前のヨーロッパにおける書物は、時代の共通教養語たるラテン語でおおむね記され、その意味においてラテン語の表記は多いなる伝統を身につけていった。それに呼応するかのごとく、六世紀頃には数種にすぎなかった略記が、世紀を経、中世へと赴く道程で多様性を帯びてゆく。その詳細は別稿に譲り、ここでは本稿に関連する主要な特長にのみ触れることとする。

まず、略記は省略の様態上、二形式に大別される。

(A) 語の綴り字の最初の部分(一文字または複数文字)を残し、その他の部分が略される。(これは現在でも、M.(Monsieur)等に見られる)

(B) 語の綴り字の中間部分(一文字または複数文字)が略される。(これは例えば現在、Mr.(Mister)等に見られるものである)。

次に視点を換え、省略を示す方式を眺めると、二通りの代表的なやり方が際立っている。

(a) ピリオド、セミコロン、アポストロフ等の特殊記号(省略符)を用いる。

(b) 肩文字 superscript lettersを使用する。

以上の(A),(B)と(a),(b)との四つが組み合わさったものの代表例を以下いくつか示すと。

(i) ATQ(atque ~と同様), hab;(habet彼は所有している), c'(cum~と共に)

(ii) $\overset{m}{f}$ (falsum 誤った), $\overset{r}{p}$ (pater 父), $\overset{r}{s}$ (super, similiter さらに, 同様に)

(iii) \overline{DS} (Deus 神), \overline{agls} (angelus 天使), \overline{nra} (nostra 我々の)

(iv) $\overset{o}{eqs}$ (equos 馬), $\overset{v}{r}go$ (virgo 処女), $\overset{o}{a}$ (anno 年)

この他、ある文字列に対応する省略記号がある。一対一の対応を示す物もあれば、数種の可能性を含む場合もある。

(v) $\overset{c}{o}$ = con, cum, cun (ex, $\overset{c}{o}$ dicio = condicio 取りきめ)

$\overset{m}{i}$ = -rum (ex, $\overset{m}{i}$ rum = mirum すばらしい)

\overline{p} = pre (ex, \overline{p} tium = pretium 価値)

\overline{q} = que

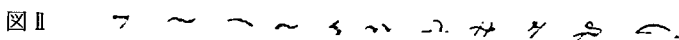
この種の物は通常のアルファベット文字に横棒(第三・四番目のもの)や斜棒(第二番目のもの)が通例付け加えられる。これらはピリオドや肩文字と共に、書記上の識別符号 diacritical mark とみなせるだろう。

これら略記の際の表示符号・識別符号に今一度目を向けると、ピリオドは現在でも略記を示す最も一般的な様式であり、肩文字は用例は少ないものの^o(segundo 第二番目の)等の様に使用されている。ところで、我々の関心の的である、文字の上に載せる横棒はと見ると、四世紀の古典ラテン語表記に既に認められ、以来略記表示の最も一般的な形式となっている。

この横棒は、単なる直線であったり、ギザギザ状、はたまた現在のティルデの如くウェーブ状の形状を呈しもする。それら10の例をPetti (1977: 22)は次のように示している。



また、Reusens (1963: 97)は上記の物と多少異なる場合も含め11種類展示する。



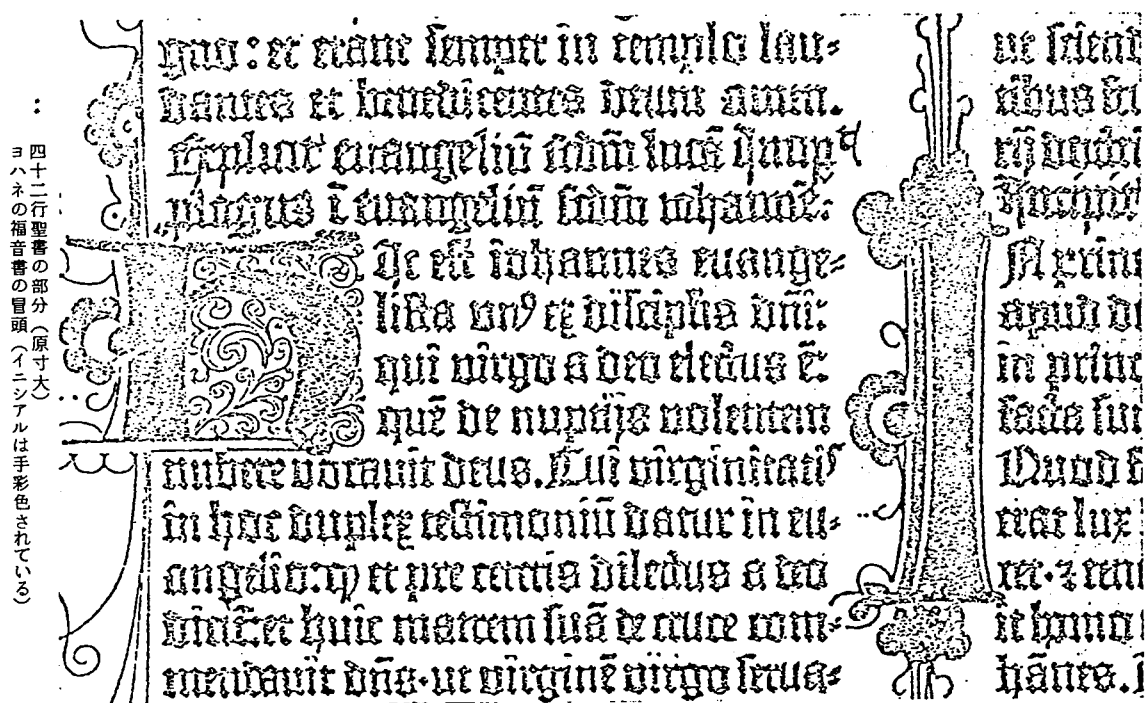
略記の最も通例な表示符号である横棒に様々な変異形があり、多少とまどいを感じるが、こういった記号はいわば書記上の一種の飾りでもあって、筆写生に様々な工夫が許されたものと思われる。

ともあれ、文字の上に置かれた横棒は、略記を意味する。そして図 I の左から3・4番目の物、図 II の左から2・4番目の変異形は、全くティルデと同一の形状をなしている。ということは、ティルデとは一般に、省略を示すものだと言えることとなろう。

2. スペインのインクナブラ（揺籃印刷本）における印刷上の略記

15世紀中葉に印刷術が発明されるまで、聖書は無論全ての書籍は筆写によって物された。大きな修道院や大学、それに王侯貴族の下には写本室が設けられ、必要に応じ筆写の作業が行なわれていたのである。が他方、安価な写本に対する広範な要望は、民間の写本工房を産み出し、印刷術発明への強力な後押しとなった。かような風潮の中で、活字印刷の先駆けとみなされる木版印刷術が、1400年頃ドイツで発明されることとなる。筆写本にかわって木版本が登上したのである。が、長持ちのせぬ版木を使用するこの印刷術は、写本と比し、より多くの金と時間とを恐らく要したに違いない。この難点は、金属活字を取り入れた活版印刷の登場により次第に解決されてゆくのであるが、衆知の如く、1455年マインツのグーテンベルグによってその端緒が開かれたのである。

ところで、四十二行聖書とも呼ばれる最初の活版本には、幾多の略記が認められる。例えば図Ⅲを一瞥し、すぐ横棒（ティルデ記号）に気付かれるであろう。

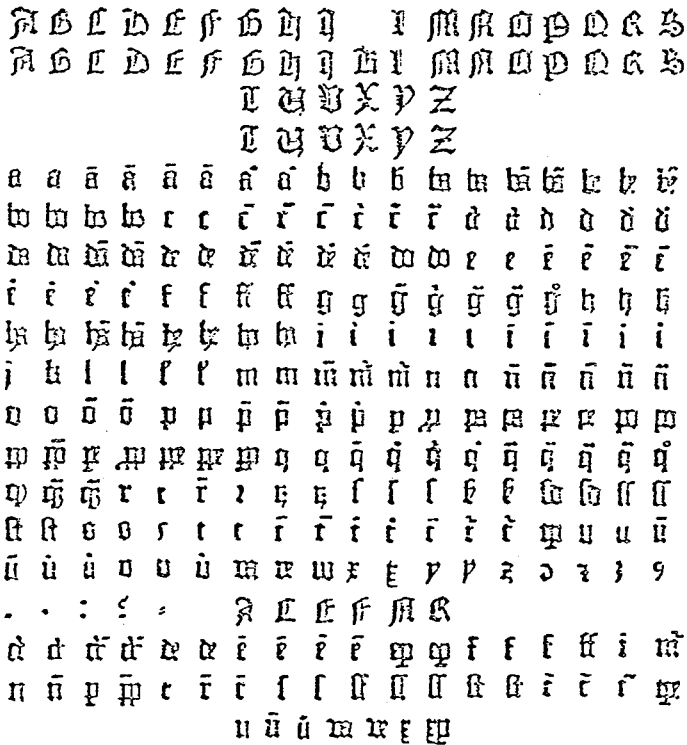


図Ⅲ（プレッサー『書物の本』P.56より）

グーテンベルグは、写本の伝統に則り、むしろ写本そのものの模倣を目指したのである。そのため省略符号も当然の事ながら活字として鑄造された。彼の意図は、次図の活字表に明瞭に確認できる。

ところで、1500年までに印刷された書物の事を、一般にインクナブラ incunabula 「揺籃印刷本」と呼び珍重されるが、写本と同様扉表紙を持たぬ点に特色がある。

では、スペインの初期印刷の実態はどうか。Sainz de Robles(1973:第1章)は、大方のヨーロッパの学者による説をしりぞけ、1475~1520年の時期は、印刷本・図書館の設立ともども稀



** グーテンベルク聖書に用いられた文字と記号
 さまざまな字形を使用することによって、行の
 長さを統一する工夫が行なわれた。

図Ⅳ (プレッサー、上掲著p.55より)

に見る隆盛を誇り、イタリア・ドイツに見劣りこそすれフランスとは同程度、その他のヨーロッパ諸国をはるかに陵駕していたと力説している。最初の印刷物については二説ある。Sainz de Robles(前掲著、第二章)は、1474年バレンシアで印刷された『聖母マリア讃歌詩集』Les Obres o Trobes en lohors de la Verge Mariaと断定⁽⁴⁾、他方 McMurtrie(1943:193)は、1473年3月5日奥付、枢機卿Rodrigo Borgiaにより、恐らくサラゴサの地で発布された免罪符であると反論している。ともかく、1470年代に最初の印刷物が産声をあげ、30年後の1500年にはスペイン全土で印刷所の所在地は25ヶ所に登ったと言う⁽⁵⁾。

そんな訳でかなりの数のスペイン・インクナブラが発刊された模様であるが、本稿ではリプリント版として現在利用可能な一著を主として取り扱いたい。それは、『俗語による聖母マリアの汚れなき呼称』Título Virginal de Nuestra Señora en Romanceという名の書物であり、パンプローナの地で1499年、アルノー・ギジェン・デ・プロカールに物されている。左右二欄組の体裁を成すゴティック字体の木版印刷本である。

次に『汚れなき呼称』の結びの部分を示す。ゴティック字体特有のd,r,sの文字の他に数種の略記が多数目につく。図Ⅴの下に省略を復元した形で原文を転写しておくので比較されたい。

Aquí se cōcluye el trata-
 do q̄ es llamado título v̄-
 ginal cōpuesto por fray a
 lōso d̄ fuēte dueña flayre
 menor d̄ la obseruācia p̄-
 sētado en s̄ta theologia
 a gloria d̄ la eterna trini-
 dad y honor d̄ la muy incli-
 ta v̄gē maria n̄ra señora
 y muy puechosa deuocion
 d̄ la s̄ta madre ygl̄ia aca-
 bose enl Año de mill. cccc
 y nouēta y nueue por mae-
 stro Arnould guilliē de-
 morāt en pompelone.

(転写)

☒ V⁽⁶⁾

Aquí se concluye el trata-do que es llamado título virginal compuesto
 por fray a/lonso de fuente dueña flayre / menor dela obseruancia
presentado en santa theologia / a gloria dela eterna trini-dad y
 honor dela muy incl-ta virgen maria nuestra señora / y muy
prouechosa deuocion dela santa madre ygl̄esia aca-bose enl Año de
 mil. cccc / y nouenta y nueue por mae/stro Arnould guillien de-
 morant en Pompelone.

(概意) 「神聖なる神学におきフランシスコ会厳肅派僧アロンソ・デ・ドゥエーニャに編まれ、多
 いにすぐれたる我らが聖母マリアの永遠なる三位一体と誉れの栄光、並びに聖なる教会の多いに有益な
 る帰依に捧げられし『汚れなき呼称』と名付けられたる著述ここにて終る。1499年パンプローナ在住
 アルノー・ギジェンの手により印刷さるる」

また、この著に用いられた略記は次のように整理できると思う。

1. 体系的略記(systematic abbreviations)

(a) 母音の上にティルデ記号が置かれてあると、次に子音 n または m が省略されている事を意味する。

(i) \tilde{a} (= an) ex. alc \tilde{a} çar (alcançar 到達する), estau \tilde{a} (estauan 彼らは居た),
frascisco (francisco フランシスコ), t \tilde{a} (tan 非常に)

\tilde{a} (= am) ex. c \tilde{a} po (campo 野原)

(ii) \tilde{e} (= en) ex. g \tilde{e} te (gente 人々), bi \tilde{e} (bien うまく), \tilde{e} (en ~の中に), biu \tilde{e}
(biuen 彼らは住んでいる)

\tilde{e} (= em) ex. si \tilde{e} pre (siempre 常に), t \tilde{e} blaua (temblaua 彼は震えていた),
ex \tilde{e} plos (exemplos 諸例), ti \tilde{e} po (tiempo 時)

(iii) \tilde{o} (= on) ex. c \tilde{o} ndici \tilde{o} (condicion 条件), c \tilde{o} (con ~と共に), n \tilde{o} bre (nonbre
名前), cora \tilde{c} o (coraçon 心臓)

\tilde{o} (= om) ex. c \tilde{o} puesto (compuesto 構成された), r \tilde{o} per (romper 破壊する), c \tilde{o} -
paraci \tilde{o} (comparacion 比較)

(iv) \tilde{i} (= in) ex. n \tilde{i} guna (ninguna 何も~ない), \tilde{i} mortal (inmortal 不朽の), \tilde{i} te-
llectual (intellctual 聡明な)

\tilde{i} (= im) ex. \tilde{i} perial (imperial 堂々とした), añ \tilde{a} s (animas 魂), \tilde{i} m \tilde{e} sa (im-
mensa 巨大な)

(v) \tilde{u} (= un) ex. j \tilde{u} tas (juntas 会), p \tilde{u} to (punto 点), com \tilde{u} nicar (comunicar 伝
える), seg \tilde{u} (segun ~に従って), a \tilde{u} que (aunque ~ではあるが)

\tilde{u} (= um) ex. h \tilde{u} ano (humano 人間の), h \tilde{u} anidad (humanidad 人類), tri \tilde{u} phante
(triumphante 勝利)

h \tilde{u} ano, h \tilde{u} anidad に見られる様に、音節境界が無視され略記されている。音声を反映する綴り
字の文字列が機械的に略記される様を示す好例である。

(b) 子音文字の上にティルデ記号が付された場合、それはある特定の文字列に相当する。

(i) \tilde{q} (= que) ex. por \tilde{q} (porque なぜならば), a \tilde{q} llos (aquellos あれら), pe \tilde{q} ñas
(pequeñas 小さい), ri \tilde{q} za (riqueza 富), \tilde{q} rian (querian 彼らは
愛していた), \tilde{q} rido (querido 愛する)

(ii) \tilde{p} (= pre) ex. \tilde{p} sente (presente 現在の), \tilde{p} ciosas (preciosas 貴重な), \tilde{p} gonar
(pregonar ふれ回る), \tilde{p} so (preso 捕われの), \tilde{p} suncion (presun-
cion 憶測)

(iii) \tilde{m} (= mn) ex. om \tilde{e} (omne 人々)

(iv) \tilde{n} (= ne) ex. e \tilde{n} ste (en este この中に), e \tilde{n} lla (en ella その中に), e \tilde{n} l (en
el その~の中に)

(iv) の \tilde{n} は図 V の se \tilde{n} ora, a \tilde{n} o の \tilde{n} の用法とは全く異なり、前置詞 en と指示代名詞または定冠
詞が並んだ場合、en の語末の n と指示代名詞または定冠詞の語頭の e とを \tilde{n} と略記している。
これらの場合一語として発音されていたと思われるが、語の境界を超えて略記が行なわれたもので
ある。

(c) ティルデ以外の記号が子音文字に付け加えられた場合、やはりある特定の文字列を示す。

- (i) **q̄** (= qui) ex. **den q̄era** (quien quiera 誰でも), **q̄ere** (quiere 彼が望む),
q̄l q̄er (qual quier 何でも), **aq̄** (aquí ここに)
- (ii) **q̄** (= qua) ex. **q̄l** (qual 関係代名詞)
- (iii) **p̄** (= par または per) ex. **p̄a** (para ~のために), **p̄ere** (parece ~と思える),
apejado (aparejado 適当な), **cōpare** (comparare 比較するように);
po (pero しかし), **empo** (empero しかし), **p̄sona** (persona 人物)
esp̄aça (esperança 希望), **p̄don** (perdon 許し), **p̄grinas** (peregrinas 巡礼者達), **p̄petuada** (perpetuada 限りない),
p̄secuciones (persecuciones 完璧さ)
- (iv) **p̄** (= pro) ex. **p̄uecho** (prouecho 有用), **pp̄betā** (propheta 予言者), **p̄bar** (probar 試す),
pp̄sidades (prosperidades 繁栄), **pp̄iamēte** (propiamente 適切に), **pp̄uidencia** (prouidencia 摂理)
- (v) **v̄** (= ver または vir)⁽⁹⁾ ex. **v̄dadero** (verdadero 真実の), **v̄de** (verde 緑色の);
v̄tud (virtud 徳), **v̄gen** (virgen 処女), **v̄ginal** (virginal 汚れない),
v̄ginidad (virginidad 純潔),
- (vi) **ð** (= de または di) ex. **pueð** (puede 彼は~出来る), **ðçedío** (deçendio 彼は~の子孫であった),
ðlicaba (delicada 繊細な), **ðrecho** (derecho 権利),
ðde (desde ~以降), **ðsr** (dezir 言う); **ðputada** (disputada 議論された),

(d) それ以外の略記

- ç** (= con)³⁰ ex. **ç** (con~でもって), **çtra** (contra ~に対して), **çcepciō** (concepcion 聖母受胎), **çdenado** (condenado 罪人), **ççiplatiuos** (contemplatiuos 黙想的な)

2. 個別的略記 (individual abbreviations)

(a) ティルデ記号を使用したもの

- (i) **esp̄u** (esp̄ritu 魂), **sp̄u** (sp̄ritu 魂)
- (ii) **esp̄ñal** (esp̄ritual 魂の), **sp̄ñal** (sp̄iritual 魂の)
- (iii) **ḡra** (gracia 神の恵み)
- (iv) **n̄ra** (nuestra 我らの)
- (v) **p̄ñia** (penitencia 悔罪)
- (vi) **p̄ñarca** (patriarca 族長)
- (vii) **t̄po** (tiempo 時)
- (viii) **v̄ra** (vuestra 汝らの)
- (ix) **x̄po** (cristo キリスト)
- (x) **x̄piano** (christiano キリスト教徒)
- (xi) **z̄c** (et cetera 等々)

- (b) アポストロフを用いて略記したもの
- (i) *eccliaſtrico* (*ecclesiaſtrico* 僧侶)
 - (ii) *glia* (*gloria* 栄光)
 - (iii) *glloſo* (*glorioſo* 至栄なる)
 - (iv) *glificar* (*glorificar* たたえる)
 - (v) *miſicordia* (*misericordia* 慈悲心)
 - (vi) *ppba* (*propheta* 予言者)
 - (vii) *vglia* (*eglesia* 教会)

多少の修正はあれ、これらは全て当時の写本の略記様式に従っている。これらスペイン語表記に使用されている略記様式は、他のロマンス語の場合と同様、ラテン語表記の略記の伝統を受け継いでおり、前節で見たピリオドや肩文字を使用した物以外は全て見受けられると言えよう。⁽¹⁾

ここで一つ指摘しておきたいのは、略記は決して義務的ではないということである。既に例示してあるように、本節で分析した木版本にも略記されている場合とそうでない場合とが混在している。行末を揃えるためにどちらかの様式を取る事だって充分あるだろうし、植字工のかなり気紛れな選択が見受けられるのである。

略記とは、元の綴り字を想定し、それを別の形に置き換えたものである。したがって略記は、元の形式のいわば派生形にすぎない。そういった両者を関係づけるのは省略規則であり、それは特に体系的省略の場合顕著である。

このように、体系的略記を副次的文字記述規則として把える事が可能であるが、それは例えば次の如く『書き換え規則』 *rewriting rules* として示すことが出来よう。

(I) Graphical Rewriting Rules (optional)

1. $v \left\{ \begin{matrix} n \\ m \end{matrix} \right\} \rightarrow \tilde{v}$ (*v* is any vowel)
2. *que* → *q̃*
3. *qui* → *q̃*
4. *de, di* → *ð*
5. *pre* → *p̃*
6. *pro* → *p̃*
7. *par, per* → *p̃*
8. *ver, vir* → *ñ*
9. *en* # { α e - } → *eñ* (α = demonstrative pronoun or definite article)

ところで、スペイン・インクナブラは、ここにあげた略記をおしなべて利用していたのだろうか。1492年8月18日サラマンカで印刷された、スペイン屈指のラテン語・人文学者 Antonio de Nebrija の『カスティーリャ語文法』 *Gramática de la Lengua Castellana* (印刷者記載なし) にしろ、25年後の1517年5月12日、アルノー・ギジュン・デ・プロカル (『汚れなき呼称』と同一印刷人) により、アルカラ・デ・エナーレスの地でこの世に出された、同じくネブリハの『カスティーリャ語における正書法』 *Reglas de Orthographia en la Lengua Castellana* にしろ、ほぼ同じ略記様式が採用されている。

だが、『汚れなき呼称』と同じく1499年、ブルゴスで発刊された一著がある。その名は、『高貴なる騎士オリベロス・デ・カスティージャならびにアルトゥス・ダルガルベの物語』La Historia de los Nobles Caualleros Oliueros de Castilla y Artus Dalgarbeで、前著同様ゴシック字体が使用されており、印刷者の名は無い。この著は、通俗読本という性質の為か、略記の様式は体系的略記のみ、しかもGraphical Rewriting Rulesで示した1~5のみが使用されているようだ。後世には、1と2だけに衰退してゆくのだが、インクナーブラの中にもその萌芽が認められ、興味深い。かように、インクナーブラの略記様式は等質性を共有しないのである。

3. ティルデ記号の機能変化

3.1 スペイン語の場合

今迄見た如く、ラテン語表記・スペイン語表記を通し、ティルデ記号は一貫して『省略表示』という機能を果たしている。そしてそれは必ずしもnまたはmの文字の省略を意味しない。前節の『汚れなき呼称』では、(1a), (1b), (2a)に示された風にティルデは用いられ、特に体系的略記の場合は直後にある特定の文字列が略されている事を意味する。ネブリハの『文法』の第三卷第十一章に見られる略記tp̃o (tiempo時)のごとく、ティルデの前の部分が略されている場合は、『汚れなき呼称』におけるtp̃oの略記方式と同様、例外的な個別略記と考えたい。要するにラテン語表記では無論のこと、スペイン語表記においても、ティルデ記号は、体系的にであれ、個別的にであれ『省略表示』という本質的機能を一貫して果しているのである。

ここで、ネブリハのティルデ記号の特殊な用法に触れておきたい。彼は、1492年の『文法』および1517年の『正書法』において/ʎ/(/tʃ/)の音を表示するものとして、cとhの文字にティルデ記号を付した複文字ch(現在では単にchと綴り、ネブリハ以前・同時代でも現在と同一の綴り方が使用されていた)を用い、また/ʝ/(/j/)の音を表示する文字として『文法』では文字xの上にティルデを置いて表記した。これは、ラテン語の権威者であるネブリハが、ラテン文字の持つ表音価値(chは/kh/, xは/ks/)と自らの言葉カスティージャ語の表音価値との相異を明確にせんがために取った表記と考えられる。つまり、ネブリハはラテン語音価を中心に据え、その観点に立ちカスティージャ語独自の音価をティルデによって表示したかったのだ。したがって、ここではティルデは『示差表示』という役割を果たしている。

従来の『略記表示』とは全く関係のないティルデの用法である。言語体系外的観点から生み出された、ティルデのこの新用法はその性質上、後世に継承されることなく終ったが、ネブリハが従来とは異なる機能をティルデに課したというのは、何か意義深い事のようにも思われる。

さて、現代スペイン語に唯一残る、文字nの上のティルデ記号は、最も注目されるべきものである。これは古典期以来、口蓋音化した/ɲ/の音を表わす文字で、エニェという一個のアルファベットの価値を確保している。この文字が表わす音価は、古典ラテン語には存在せず、俗ラテン語からロマンス諸語へと発展する過程で生じたものである。この新しい音価を表記すべく幾つかの模索が為されたが、『鼻音性』と『口蓋音性』の二特徴の複合音とみなし、この音的特性を二つの文字を使って書き表わそうとした。すなわち、『鼻音性』に対してnという文字をあて、他方『口蓋音性』には、口蓋音化した母音iまたは硬口蓋子音gをあて、結局全体としてni (ny), gn, ng等と綴られることとなった。がその

他に、例えばラテン語の annu(年) が、カスティーリャ語の /a jno/ に相当する所から、/ p / の音価に綴り字 nn を当てるという事もなされ、この様式が次第に優勢を帯びてくるのである。1492 年のネブリハの『文法』では gn と ñ の両者が用いられているのに反し、1517 年の『正書法』では ñ のみが示されている。彼の偉大なる文法学者も言語の規範・時代の波に押されていったのだろうか。

ところで、año という表記は、13 世紀初頭に筆にされたと言われる『わがシッドの歌』Poema de Mio Çid に既に見られる。したがって文字 ñ はかなり早くから使用されていたと考えられよう。また丁度同じ頃、ゴンサロ・デ・ベルセオがリオハ方言で物にしたという『聖ドミンゴ・デ・シロスの生涯』La Vida de Santo Domingo de Silos の冒頭に近い部分では、nn と表記されている語がかなり目につく。manna (maña 方法), sennalado (señalado 優れた), ninno (niño 男の子供), anno (año 年), mannana (mañana 朝), canna (caña 葦), Sennor (Señor 神), danno (daño 害悪), enganno (engaño 偽り) 等。『シッド』の año と、ベルセオの anno の比較で明白だと思うが、ñ は nn に対応する。つまり、一つ n が略されたかわりにティルデが付加されているのだ (Spaulding (1962; 77) 等参照)。したがってこの場合、ティルデは本来の『省略表示』という伝統的機能を発揮しているのであって、後ろの n が前の n の上に小さく書かれていた物が次第に波状の記号に変化していったのだという説は全くあたらない¹⁰⁾。そのように考える人は、ラテン語表記からなんなんとするティルデの基本的用法を今一度振り返って見る必要がある。

口蓋音化した n の音価を表すため n を二つ重ねて表記された事もあったのだが、他の子音の場合、そのようなダブリ綴りはなかったろうか。いやある。まず、硬口蓋側音 / ɲ / は、文字 l を二つならべて表記された。同様にふるえ音の / r / は、rr と記され、また母音間の無声の / s / 音は、ss と s の文字がダブルされた。その他、文字 f や c が二つ並べられて書き印された例も多い。ll と rr は現在まで残っているが、他の場合は全て消滅してしまった。ここで再びベルセオの前掲著を例にとってみよう。

- (1) ll の場合: nulla (少しの～もない), fallencia (過ち), orilla (川辺)
- (2) rr の場合: carrera (生活), tierra (土地), arribó (彼は到着した)
- (3) ss の場合: confessor (聴罪師), assentó (彼は据えた), passaron (彼らは通り過ぎた)
- (4) ff の場合: officio (勤行), offrenda (喜捨)
- (5) cc の場合: peccado (罪), peccava (彼は罪を犯した)

nn が ñ と省略表記されることとなったからには、史的に勝ち得た規則

(II) Special Graphic Rule

nn → ñ

の適用範囲をより一般化した規則

(III) Generalized Special Graphic Rule

cc → c̃ (c is any consonant)

にまで言語意識が拡張してゆくと、当然上記(1)~(5)の場合にもティルデが付された略記が見られるはずなのだ。だが歴史はその道を選択しはしなかった。なぜか。

ñ が発明された段階で、これは前節の Graphical Rewriting Rules とは全く別の意味合いを持ったからではないだろうか。この場合、ティルデ記号が省略とは全く異なる機能を特別に有してしまっ

ただ。それは『鼻音的』という特性であったに違いない。つまり、単なる省略表示記号から、『音声表示記号』へと質的变化を起こしたのである。

前節のGraphical Rewriting Rules (I)の1, 2のティルデ省略様式は17世紀まで(例えば、『アンダルシアの愛人達』Los Amantes Andalvzes (1633))存続する一方、恐らく13世紀には既に新しい意味合いをもつティルデの用法が確立しつつあったのだ。それから四世紀もの間、新旧二種の機能が併存した訳だが、Graphical Rewriting Rulesの1, 2の規則と、Special Graphic Ruleの規則とは適用される文字列が異なるため互いに衝突せず、いわばティルデが相補的機能の関係にあったため、言語使用者もさほど不自然・不自由を感じないまま、並存は続いたものと思われる。

3.2 ポルトガル語の場合

ティルデ記号を正書法上利用している他のロマンス語としてポルトガル語がある。その歴史はどうか。ポルトガル語では、ティルデのことをティルと呼ぶが、中世の時代 \tilde{q} と表記して、文字列queの略記を示した($por\tilde{q}$ (porqueなぜなら)、 $\tilde{q}r$ (quer彼は望んでいる)等)。この点スペイン語の用法と同一である。

が、他方母音の鼻音的特性を表示するかの場合が12世紀頃既に存在していた。¹³⁾ Williams (1938: § 26)によれば、語末の母音の鼻音的特性を表わすため文字mを付け加え、例えば、com(〜と共に)、quem(誰)、rem(何も〜ない)等と書き表わされたが、同時にティルを用いてそれぞれ $c\tilde{o}$, $qu\tilde{e}$, $r\tilde{e}$ とも表記されたという。このような表記上の揺れは、1483年君主に捧げたGarçia de Resendeの詩のプロローグの中にも見られる(Pereira Tavares (1961: 71-73))。nunca \sim nũca(決して〜ない)、grande \sim grãde(偉大な)、nem \sim nẽ(もまた〜でない)、tantos \sim tãtos(それだけ多くの)、tan \sim tã(そんなに)。

これら一連のペアーから、

$$(IV) \quad v \left\{ \begin{array}{c} n \\ m \end{array} \right\} = \tilde{v} \quad (v \text{ is any vowel})$$

とも示される等式が認識される。この際、等式の左辺の綴り字は鼻母音を表示するものであり、それが等式の右辺ではティルとなって表示されている事になるだろう。ティルを導入し、

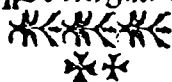
$$(V) \quad v \left\{ \begin{array}{c} n \\ m \end{array} \right\} \rightarrow \tilde{v}$$

の綴り字規則を確立するにあたり、ティルはラテン語表記における伝統的機能・『略記表示』を発揮し、nまたはmの文字の略記を意味した。が、同時にティルは母音の『鼻音特性表示』の機能を、副次的に果たすことになったのである。二種の機能double functionを同時に合わせ持った訳だが、(V)の左辺の綴り字がスペイン語の場合と異なり鼻母音の音価を持っていたことに帰因する。ともあれ、ポルトガル語のティルは、スペイン語の \tilde{n} の場合のティルデと同一の機能・『鼻音性表示機能』を獲得したのである。そしてその獲得期は、恐らくスペイン語の場合よりも早かったかもしれない。

ここで、ポルトガル初期活版本でのティルの用法を見ておこう。その例として、1536年1月27日、Germão Galhardeの手によりリスボンの地で刊行されたFernão de Oliveira著『ポルトガル語文法』Gramática da Linguagem Portuguesa(最初のポルトガル語文法書)を取り上げたい。この著は、発刊年から見てインクナーブラと呼べないが、扉表示を持たず、そのかわりコロフォーン(奥付)を有すので、いわゆる「インクナーブラ様式」の印刷本の一例である。

図VIに明らかな如く、前節のスペイン・インクナーブラ『汚れなき呼称』(1499)で既に観察した物、

Esta he a primeyra annotação que Fernão do
 lueyra fez da lingua Portuguesa. Dirigida ao mui
 manífico senhor: e nobre fidalgo o senhor dom
 fernando Balmada. Filho herdeyro do
 muy prudente e animoso Senhor
 Dom Elntão. Capitão geral
 de Portugal. .xc. .



Muy manífico senhor.



Entendião em mi dous pareceres
 diuerfos. I hum me dezia q̃ não acu-
 passe a grãdeza de seu entêder co esta
 minha peq̃na obra. E outro me amo-
 estou não fosse buscar mais longe os
 fauores de meus princípios poys a
 muyta nobreza e antiga d̃ seu sangue
 me chamaua. E qual nam se conten-

tando com os altos princípios Balmada: ajuntou con-
 sigo a gloria immortal e victoria Sabrãches; e sobre tudo
 me prendeo a virtude mais que humana de sua merçe.
 Estas cousas me obrigão e fazem julgar q̃ elle abalta não
 so pera meu intento q̃ so hum homẽ bayxo: e estendesse
 a pouco meu animo: mas itambẽ a lingua de tam nobre
 gente e terra como he Portugal viuera contête e folga
 ra de se estender polto mundo se levar nestes primeyros
 encontros por seu escudo o nome de tão bõs exerciçios
 como sãõ os de sua merçe o qual na paz e quietação em q̃
 viuemos não despêde mal: mas aproueita seu tempo lê
 do bos liuros para sy e no regimento de sua casa primey

図VI 『ポルトガル語文法』第一ページ

つまり Graphical Rewriting Rules (I) に相当する略記が、全く同様に、ひんぱんに用いられている事が、一見して了解される。最初の三ページおよび奥付の中から例をあげると次のようになる。

1. 体系的略記

- (a) 母音の上にティルが置かれ、次に子音文字 n、または m が略されている場合（ただし、スペイン語の場合と異なりティルは『鼻音表示』の機能も合わせ持っている）

ex. grãdeza (grandeza 偉大さ), alghũas (algunas 幾つかの), gẽte (gente 人々),
 comũ (comun 共通の)

(b) 子音の上にティルが付され特定の文字列を略記している場合

(1) \tilde{q} (= que) ex. \tilde{q} (que 文接続詞), $\text{por}\tilde{q}$ (porque なぜならば), $\text{pe}\tilde{q}\text{na}$ (pequena 小さな)

(2) \tilde{p} (= pre) ex. $\tilde{p}\tilde{g}\tilde{a}\tilde{o}$ (pregano 喧伝)

(c) ティル以外の記号を子音文字に付け加え、特定文字列の略記を示す場合

(i) \tilde{v} (= $\tilde{v}\tilde{c}$) ex. $\tilde{v}\tilde{i}\tilde{p}\tilde{r}\tilde{e}\tilde{z}\tilde{o}\tilde{s}$ (desprezos 軽べつ)

(ii) \tilde{q} (= qua) ex. $\tilde{q}\tilde{l}$ (qual どれ), $\tilde{q}\tilde{u}\tilde{a}\tilde{n}\tilde{t}\tilde{o}$ (quanto 関係代名詞, ~するところの物全て)

(iii) \tilde{q} (= qui) ex. $\tilde{q}\tilde{u}\tilde{i}\tilde{n}\tilde{h}\tilde{e}\tilde{n}\tilde{t}\tilde{o}\tilde{s}$ (quinhentos 五百)

(iv) \tilde{p} (= pro) ex. $\tilde{p}\tilde{r}\tilde{o}\tilde{n}\tilde{u}\tilde{n}\tilde{c}\tilde{i}\tilde{a}\tilde{r}$ (pronunciar 発音する)

2. 個別的略記

(a) ティルを用いたもの

ex. $\tilde{x}\tilde{p}\tilde{o}$ (Cristo キリスト)

(b) ティル以外の省略符を使用したもの

ex. $\tilde{c}\tilde{c}$. (et cetera 等々)

\tilde{q} は 18 世紀まで生きのびるものの(例えば Joseph Pereira Bayam の『実史シッド・カンペアドール』*Historia Verdadeira do Cid Campeador* (1734)に見られる), 他の体系的・個別的略記は Camões 等 16 世紀近代期に姿を消してしまったらしい。ティルの用法は、最後に獲得した価値・『鼻音特性表示』のみに限定され今日に至るのである。

ここに二つの疑問が浮かぶ。まず一点。現代ポルトガル・ブラジル語で母音 + n または m は鼻母音を表わし、また母音上にティルを置いても同一の音価を示す。だが、正書法上ティルを伴えるのは a と o のみである。一体なぜなのだろうか。

次に二点目。/ \tilde{p} /の音価が、スペイン式に \tilde{n} ではなく nh と表記されるのはなぜだろうか。ティルの鼻音表示機能が、当時の書記生に十分認識されていたならば、この場合にもティルを用いた表記が採用されてしかるべきではなからうか。

まず、第一の疑点に関すと、中世の表記では全て母音の上にティルが付されえた。既にあげた Williams の例に明らかであり、また『ポルトガル語文法』(1536)にもそれを裏付ける例が多数見受けられる。したがって、後世の正書法上の整理の過程で、ティルの付されうる母音が限定されてしまったのである。逆に言えば、ティルの用法の範囲が縮小されたのである。

nh の綴り字については、/ \tilde{h} /の音価の綴り字 lh との関連付けて考慮すべきである。Williams も述べる如く、表記の混乱期には nh は nn、他方 lh は ll と書き印されていた。ところが、nh と lh という綴り字がプロバンス語から借用されたという¹⁴⁾。12・13 世紀の事である。プロバンス語では例えば“栗の実”は castanha ((羅) castanea), “娘”は filha ((羅) filia) と綴られる。要するに、二種の硬口蓋子音が nh, lh と表記されるのである。ここで、このような表記が生じた事の由来なるものを考えてみよう。/ \tilde{p} /音は確かに鼻音性の音価を持つが、同時に/ \tilde{h} /の場合と同様、『口蓋音的特性』をも合わせ持っている。またプロバンス語に『硬口蓋破擦音』/ \tilde{t} /の音があるが、これは ch と綴られる(例えば、chantar 歌う)。これら三者の音声は、『硬口蓋音』という音声的特徴を共有する。そして、それは h という文字に反映されてはいないだろうか。つまり当時のプロバンス語の書記生

は、三者の音声にまたがる共通特性を文字面になんとか反映させる事を目論み、それを文字hにたくし、nh, lh, chと綴ったと考えられないだろうか。/h/の音声的位置付けは難解だが、⁶⁾その異音として無声軟口蓋摩擦音[x]がある。[x]を表記しようとするとhを用いたであろうが、⁷⁾この対応関係を特にnh, lhの綴り字のhの使用に応用したとも考えられる。同様の試みは、口蓋音特性をgで示し、gn, glと綴るイタリア語表記にも見られる。

俗ラテン語・ロマンス諸語が書記生によって表記される際、ラテン語表記の素養が下地になっている事は言うまでもない。ラテン語に無い新しい音価を書き印したい時、二つの道がある。一つは既存の綴り字に新しい音価を与える事であり、他はラテン語表記にない新しい綴り字を工夫して新音価を示すやり方である。このようなラテン語表記の適用adaptationは、

$$(V) \frac{\text{ラテン語の綴り字}(g_1)}{\text{ラテン語の音声}(p_1)} = \frac{\text{ロマンス語の綴り字}(g_2)}{\text{ロマンス語の音声}(p_2)}$$

《W₁》 《W₂》

共通の意味を持つ語(W₁とW₂)の音価と綴り字の相関関係に基いてなされ、g₂が誕生する。例えば、前述したスペイン語のannoは、

$$\frac{\text{annu}}{\text{/annu/}} = \frac{?}{\text{/a p o/}}$$

の等式に基づき、《対ラテン語表記相関原則》により採られた綴り字である。そして、nnが/p/という新音価を表示することとなったのである。

lluvia (雨) の場合は、少し異なる。

$$\frac{\text{pluvia}}{\text{/pluwia/}} = \frac{?}{\text{/lubia/}}$$

先の例に見た相関原則には従わず(つまりplという綴り字を採用せず)、illa(あれ)に見られるllの綴り字を当てた。ラテン語のlの音価はごく単純な側音であり、illaは、/il·la/と発音される。したがってll=/l/と既存の綴り字が新音価を持ったことになる。また、plのかわりにllを当てた点に一寸した機知が見られる。

イタリア語のgn, glも同様に既存の綴り字に新音価が付与された例である。

先ほど触れたようにポルトガル語表記では/p/、/l/の音価にそれぞれnh, lhの綴り字をプロバンス語書記から採用した。だが、この綴り字はラテン語表記に存在せぬ物である。新しい綴り字で新音価を示すという第二の道が選択されたのだ。したがって、スペイン語表記の如くnnともñとも表記されないのである。プロバンス語の書記生の/p/と/l/音の共通特性の認識。その新綴り字への反映、これが他のロマンス語表記との相異であり、かつ漸新さである。

文字論の第一人者、河野六郎氏は、東京教育大学の講義で『表音文字の発明者またその適用者は、言語学者がその言語の音声・音韻を意識的に明確化しようとする事を、無意識的に既に行っている。彼らはいわば、偉大な音声学者・言語学者である』という旨の御意見を語られたが、この言葉をロマンス語書記生、特にプロバンス語の書記生に捧げたい。

4. むすび

現在、ティルデ記号は、一般的に二種の機能を持つ。

(1) 国際音声記号におけるごとく鼻音化記号

(2) 辞書の記述等で波ダッシュ *swung dash* として用い、ある単語・音節・句の省略を示す。

本論で述べたように、(1)の用法は、省略表示というティルデの基本的機能から副次的に産み出された新用法である。ただポルトガル語表記におけるこの新用法は、はなはだ限定されている。その制限を取り払い、より一般的な形で利用したのが、国際音声記号の考案者である。

他方、(2)の方は、『“walk の変化は、“walk , ~ed , ~ing ”である』という風な使い方、またスペイン語辞書等での動詞の項の“~se (se がついた場合)”、あるいは『10~13世紀』などに見られる用法である。これらはコンテキストの助けを借り、元の形式に容易に復元可能な省略様式である。¹⁸⁾これらのティルデは、文字の上に付せられない点で伝統的な様式とは異なるが、古典ラテン語表記にのつとる伝統的な『省略表示機能』を果す点では相通じている。

省略表示の働きを為すティルデの用法は、15~17世紀の印刷本の中にも随分観察される。他方12・13世紀頃、ポルトガル語・スペイン語の表記において、ティルデは新機能を帯びた。省略の機能によって略された綴り字が、偶然鼻音性を有す物であったため、あたかもティルデそのものが『鼻音性表示機能』をもつものとみなされ、後この新価値に落ちついてゆくのである。

ソシュールが指摘するように、記号は恣意的であり、非アルファベット系の識別記号ティルデもその例外ではありえない。記号とその指示的意味・機能が恣意的であるという事は、必然的に記号価値の不安定性を内包し、それは意味変化・機能変化へと導く。省略表示機能に始まったティルデは、副次的にせよ新しい鼻音表示機能の獲得へと展開していったのである。

(Oct. 1982)

注

『汚れなき呼称』(1499)でコメントをいただいた大阪外語大の中岡省治先生、またポルトガル語関係の文献を利用させていただいた大阪外語大の河野 彰氏、そして本稿が形を成すずっと以前にティルデ記号の事で御意見をお伺いさせていただいた元東京教育大学言語学科教授河野六郎先生に心より感謝申し上げます。なお本稿は、82年春第18回ロマンス語学会(於、東京外国語大学)で発表した内容に多少手を加えたものである。

- (1) 準備中の『中世ラテン語表記の略記』に今一つ詳細に呈示する予定である。
- (2) 例えば、ラテン語表記のあまりの判読困難さを嘆き、時のフランス王Philippe le Belは1304年7月、略記を慎むよう王令を下している (Reusens(1963:95))。
- (3) 『頭音の原理』については、西田龍雄編(1981:24その他)を参照。ただし、Gelb(1969)はこれを俗説として退け、むしろ彼の説く『重複削除の法則』Principle of Reductionなるものを単音文字発生の因とする。
- (4) この著は、同地で同年開催された『聖母マリア讃歌コンクール』に寄せられた40名の詩人の45の詩文を印刷した物で、内41作品がバレンシア語、三作品カスティーリャ語、一作品トスカナ語で書かれていると言う(Saintz de Robles(1973:59))。
ところで、Saintz de Roblesの著述は1973年に出版されてはいるものの、彼がマドリード大学に1938年提出した博士論文そのままである。したがって彼自身『前書』で述べているように、その後の研究に、例えばMcMurtrie(1943)に触れてはいない。
- (5) 例えば、Wolff(1971:222-223)の図に示される如く、ヨーロッパ各地に活版印刷所が急激に拡散してゆくが、スペインもその例外ではない。Saintz de Roblesによると、バレンシア(1474)、サラゴサ、バルセロナ(1475)、セビーリャ、トルトサ(1477)、レリダ(1479)、サラマンカ、バリャドリッド(1481)、サモラ(1482)、グアダラハラ、サンティアゴ、ヘロナ、ウエテ(1483)、タラゴナ、トレド(1484)、ブルゴス、イハル、マジョルカ(1485)、ムルシア(1487)、モンテレイ(1488)、パンプローナ、コリア、サン・クガ・デ・バレェス(1489)、グラナダ(1496)、モンテセラート(1499)といった具合である。
- (6) 本稿に転載の都合上一欄にまとめたが、実際は、上の六行は最終ページの左欄下部に、残りは右欄上部に位置する。
- (7) この略記方式は、ラテン語略記の例 (V) の四つ目に示したものと同一である。
- (8) この略記方式は、ラテン語略記の例 (V) の三つ目に示したものと同一である。
- (9) この略記方式は、ラテン語略記の例 (IV) の二つ目に示したものと同一である。
- (10) この略記方式は、ラテン語略記の例 (V) の最初に示したものと同一である。なお、これはキケロの奴隷のマルクス・トゥリアス・ティロが編み出した速記法に由来するものである。これについては、ブレッサー(1973:124)等参照のこと。以上の事からも、ロマンス語表記にラテン語表記がいかに強烈に影響しているかがよく理解される。
- (11) 使用のテキスト『汚れなき呼称』全部を調査した訳ではないので、特に個別的略記でデータ漏があるものと思う。なお、本稿で取り上げたラテン語略記およびこれらスペイン語略記は、読解の際の形式に直して読まれ、発音される。したがって元の形式への依存度が強く、有吉(1982)が言う単純略

記 simple abbreviation に属するものである。

- (12) Martínez Amador (1960: 938) は ñ の項目で『nn の後の方の n が略され、最初の n の文字の上のティルデに変化した』と説明し、引き続き類例として mente にかわる mēte を示している。これではティルデはあたかも n の省略のような印象を、ティルデは文字 n から派生した特殊記号という感を我々読者に与えかねない。
- (13) ポルトガル語における鼻母音の出現の時期は、Posner (1966: 113) によると、フランス語と同様 10 世紀であり、Otero (1976: 75) では少くも 9 世紀中葉まで遡るという。
- (14) Williams (1938: 23) や、Entwistle (1936: 293) 等参照のこと。
- (15) だが、Hamlin et Ricketts (1967: 15) によると多様な綴り方があったらしい。nh の他に、ingn, gn, ign, ing とあり、一方 lh については ll, il, ill, li, lli, illi と綴られる有様である。
- (16) 例えば、小泉・牧野 (1971) を参照のこと。
- (17) Hierche (1970: 514) によると、ガスコーニュ地方では、/h/ 音が保たれているようだ。
例・hilha (娘), hlor (花)。
- (18) 『～から』『～以後』という風に一般的な用法を示し、具体的に復原されない場合もある。つまり、『～』に相当する箇所に様々な名辞が挿入可能である。

使用テキスト

- Anónimo. *Poema de Mio Cid. Edición, Introducción y Notas de Ian Michael*. Madrid: Castalia (1978)
- Berceo, Gonzalo de. *La Vida de Santo Domingo de Silos. Estudio y Edición Crítica por Brian Dutton*. London: Tamesis Books (1978)
- Castillo Solorzano, Alonso de. *Los Amantes Andalvzes (Barcelona, 1633)*. Georg Olms: Hildesheim (1973)
- Fuentidueña, Alonso de. *Ttulo Virginal de Nuestra Señora en Romance (Pamplona, 1499)*. Pamplona: Ediciones Universidad de Navarra (1978)
- Nebrija, Antonio de. *Gramática de la Lengua Castellana (Salamanca, 1492). Edición Preparada por Antonio Quilis*. Madrid: Nacional (1980) and *Gramática Castellana. Reproducción del Incunable y Apéndices. Edición Crítica de Pascual Galindo Romeo y Luis Ortiz Muñoz*. Madrid: Edición de la Junta del Centenario (1946)
- Nebrija, Antonio de. *Reglas de Orthographía en la Lengua Castellana (Alcalá de Henares, 1517) Estudio y Edición de Antonio Quilis*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo (1977)
- Oliveira, Fernão de. *Gramática de Linguagem Portuguesa (Lisboa, 1536)*. Lisboa: Biblioteca Nacional (1981)

- Oliveros de Castilla. *La Historia de los Nobles Caualleros Oliueros de Castilla y Artus Dalgarbe* (Burgos, 1499) New York: Kraus Reprint Corporation (1967)
- Pereira Bayam, Joseph. *Historia Verdadeira da Famosissimo Heroe, e Invencivel Cavalleiro Hespanhol Rodrigo Días de Bivar, Chamado por Excellencia o Cid Campeador*. Lisboa: Officina de Antonio de Sousa de Sylva (1734)
- Pereira Tavares, José (ed.) *Antologia de Textos Medievais*². Lisboa: Sá da Costa (1961)

参 考 文 献

- 有吉俊二, 「略語の文法と機能」言語研究 81号, pp. 109—110. 東京: 日本言語学会(1982)
- Battelli, Giulio. *Lezioni di Paleografia*³. Città del Vaticano (1949)
- Entwistle, William J. *The Spanish Language Together with Portuguese, Catalan and Basque*. London: Faber & Faber (1936)
- Gelb, I. J. *A Study of Writing*. Chicago: The University of Chicago Press (1969)
- Hierche, Henri (ed.) *Manual Pratique Philologie Romane. Tome I*. Paris: Picard (1970)
- 小泉 保・牧野 勤, 『英語学大系 1, 音韻論 I』 東京: 大修館(1971)
- 河野 六郎, 『河野六郎著作集 第三巻』 東京: 平凡社(1980)
- Martínez Amador, Emilio M. *Diccionario Gramatical y de Dudas del Idioma*. Barcelona: Ramón Sopena (1960)
- McMurtrie, Douglas C. *The Book: The Story of Printing & Bookmaking*. London: Oxford University Press (1943)
- 西田龍雄編, 『講座言語 第5巻 世界の文字』 東京: 大修館(1981)
- Otero, Carlos-Peregrín. *Evolución y Revolución en Romance : Mínima Introducción a la Diacronía. Tomo II*. Barcelona: Seix Barral (1976)
- Pelizer, Auguste. *Abréviations Latines Médiévales*. Louvain: Publications Universitaires (1966)
- Petti, Anthony G. *English Literary Hands from Chaucer to Dryden*. London: Edward Arnold (1977)
- Posner, Rebecca. *The Romance Languages: A Linguistic Introduction*. New York: Anchor (1966)
- Presser, Helmut. *Das Buch vom Buch*. (ヘルムート・プレッサー著・轡田収訳『書物の本, 西欧の書物と文化の歴史. 書物の美学』 東京: 法政大学出版局(1973)

- Reusens, Chanoine. *Eléments de Paléographie*. Bruxelles: Moorthamers (1963)
- Riesco, Angel y otros. *Paleografía*. Madrid: Universidad Nacional de Educación a Distancia (1977)
- R. Hamlin, Frank, Peter T. Ricketts et John Hathaway. *Introduction à l'étude de l'ancien Provençal*. Geneve: Droz (1967)
- Saintz de Robles, Federico Carlos. *La Imprenta y el Libro en la España del Siglo XV*. Madrid: Vassallo de Mumbert (1973)
- Spaulding, Robert K. *How Spanish Grew*. Berkeley: University of California Press (1962)
- Williams, E. B. *From Latin to Portuguese*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press (1938)
- Wolff, Philippe. *Origen de las Lenguas Occidentales, 100–1500 D. C.* Madrid: Guadarrama (1971)

On the Function of Tilde

Shunji ARIYOSHI

[Summary]

This paper intends to clarify the function of the tilde whose usage derives from Roman times. The horizontal bar, which was placed above the letter(s) or the whole word, indicated omission or contraction in the spelling. In that sense, the bar or tilde was only one of the various diacritic marks of abbreviation such as period, colon, semicolon, apostrophe, superscript letters and so forth. And this manner of usage is still observed in the use of swung dash, such as "The inflected forms of "walk" are "walk, ~ed, ~ing" ".

Meanwhile, around the 12th century the new usage of the tilde appeared in Portuguese and Spanish writing system respectively. In that period the Spanish pronunciation of the palatal nasal /ɲ/ was described as "nn" or "ñ". The latter, with a tilde, is the abbreviate variant of the former. In this case the tilde functions as a mark of abbreviation, following its traditional usage. But at the same time it turned out to be an indicator of nasal. While the Portuguese language had attained nasal vowels about the 10th century, and its phonetic value was reflected in the spelling as vowel with "n" or "m", such as "an" or "am" for /ã/. Then these combinatory letters became abbreviated with a tilde, such as "ã" for "an" or "am". This tilde is also used as a mark of abbreviation just like in the Spanish case shown above. And in this case also, the tilde gained its new function of the indication of nasal. Therefore, in both cases the tilde abbreviates the letters with a nasal value, and its phonetic characteristic is transferred to the tilde.

With time the use of the tilde placed above the letter(s) as a mark of abbreviation disappeared. In the Spanish and Portuguese printed books its disuse is confirmed around the 18th century. And only the tilde used as an indicator of nasal has remained. Thus the function of the tilde was entirely changed. Now the tilde is used as the general mark of nasal vowels in the international phonetic notation.

Saussure said that the linguistic sign is arbitrary, i.e., the correlation between the phonetic value of a linguistic sign and its corresponding meaning or reference is arbitrary and they don't have any necessary relationship. This fact implies that the correlation of the linguistic sign can be changed, if necessary. And the tilde, like other linguistic signs, experienced a functional change, not being an exception of the Saussure's concept of linguistic sign.